



聞かせてください 神さまと出会った時のこと

〜エマオへの道で〜 第4回 フラビオ・ベスコ神父 (聖ザベリオ宣教会・泉佐野教会)

イタリア、ヴィチエンツアの生まれ。神様がいて、家族がいて、私がいる。周りの誰もがカトリック信者で毎週ミサに行く、そんな環境で育った人は、生まれたときから神様に会っていると言うしかない。イエス様の話を最初、母の膝の上でした。

「召命」という意味でも、特別なことはなかった。小学5年の時、一人のザベリオ会宣教師が、私の教会で遠い国の話をしてくれました。インター

ネットもない時代、宣教師の話は大変人気があった。そこで配られた子ども向け雑誌のアンケートに答えると、しばらくして、優しいようなザベリオ会の人、山へキャンプに行かないかと家までやって来た。ベタバタする海には行きたくなかった

聖書の中にも、神様との出会いがあった。大神学校の聖書の勉強は、まるで新しい出会いのようでした。特に旧約聖書とパウロの手紙。これは人生の光になるのではな

いかに、皆にも伝えなければ。二人はその体験を通して、イエス様はずっと私たちの中に一緒にいて、同じ家族にしてください。夜にも関わらず、共同体的に歩いていくのです。キリストの命を受けて、体を受けて、キリストと一つになり、一つの家族となるという意識があれば、私たちも神様との出会いが可能でしょう。

1948年、イエスの小さい兄弟会に入会。50年に初誓願。56年来日。川崎市(桜本町)に「兄弟の家」開設。61年6月司祭叙階。川崎市(戸手町)に「兄弟の家」開設。80年ごろ、福井県敦賀市に移住。2010年、和歌山県に移住。23年4月3日肺炎のため生協有本病院で療養。

友人のジャック・マリタン(哲学者)が来日の際は、労働者と飲み、語り合い親交を深めた。

被差別部落民の解放を目指し、その運動に積極的に取り組んでいた。また子どもたちの教育に力を入れ、幼稚園に限らず、小中学校にも赴き、非差別問題をとり上げ講義演じていた。

「カテキズムの学び」

第43回 洗礼の秘跡(後半)

*クラスは右のQRコードから



洗礼の秘跡の教えには、一見矛盾した二つの立場があります。「洗礼は救いのために必要である」と「洗礼を受けていなくても救われ得る」です。

洗礼が救いに必要なことは、主ご自身が断言しておられます。「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」(ヨハネ3・5)。……教会は永遠の幸福の保証を与えるための、洗礼以外の手段を知りません。(1257番)

受洗者が人口の1%にも満たない日本では、信者の家族の中にも洗礼を受けていない人は珍しくありません。洗礼を受けずに亡くなった親や、洗礼を受けていない子どもや孫は救われるのかという疑問は切実です。カテキズムは「洗礼を受けていなくても救われ得る」ことをこう述べています。

キリストはすべての人のために死なれたのであり、……聖霊は神のみが知っておられる方法によって、すべての人に過越の神秘にあずかる可能性を提供されることをわたしたちは信じなければなりません。(1260番)

このことは、洗礼の必要性和矛盾しないのでしょうか？ その点はこう述べられています。

神は救いを洗礼の秘跡に結びつけられましたが、神ご自身は秘跡に拘束されることはありません。(1257番)

キリストとその教会とを知らずに真理を求め、自分の知るところに従って神のみ旨を行うすべての人は救われうのです。このような人々は、洗礼の必要性を知っていたなら、洗礼を受けたいという望みを表明したに違いないと考えられるからです。(1260番)

洗礼を受けていなくても、正しく生きた人を神様は救ってくださるので。だからといって洗礼を受けなくてもよいわけではありません。たとえるなら、救いに達するために神様が準備して下さった冷暖房完備の快適な列車に乗らずに、歩いていくようなものです。

「百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ」(マタイ19・29)ための確かな手段として洗礼があることを、周囲に宣べ伝えていきましょう。

(文 酒井俊弘補佐司教)

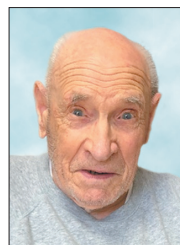
訃報



アンドレ・ゲイ神父(イエスの小さい兄弟会)は、2023年4月9日、帰天。94歳。フランス出身。

「兄弟の家」開設初期の兄弟として「祈りたい、働きたい」ただそれだけの思いで社会生活の中で、特に、小さい人、見捨てられた人、みんなに顧みられない人、そういう人たちに寄りそって祈り続け、共にあろうとした。

51年9月司祭叙階。同年10月来日。日本語勉強後、52年58年相生教会で司牧。58年61年笠岡教会(岡山県)で司牧。61年2015年倉吉教会の主任司祭を務め、61年2022年倉吉幼稚園長を兼任した。



レナート関亮一神父(淳心会)は、2023年5月31日、仁豊野ヴィラで老衰のため帰天98歳。ベルギー出身。

被差別部落民の解放を目指し、その運動に積極的に取り組んでいた。また子どもたちの教育に力を入れ、幼稚園に限らず、小中学校にも赴き、非差別問題をとり上げ講義演じていた。

「生きる」―難民移住者

人権に優る国益とは何ですか

6月8日、出入国管理及び難民認定法(入管法)の改定案が参議院法務委員会で行採決されました。与野党の議員が激しくもみ合う中、強行採決される有様を私たちは難民の仲間たちと一緒に見ました。目を見開き手で口を覆う人、「収容所で難民の死者が増えるよ」と叫ぶ人、事務所には重苦しい空気が漂いました。入管法の議論は、日本人には馴染みのない法律のせい、世論の大きな関心事にはなりません。実態をよく知らない多くの市民は「難民制度を濫用



国会議員に思いを伝える仮放免の子どもたち

して送還忌避する犯罪者」とのイメージを抱き、治安を守るための法改定だと捉えていたと思います。一方、難民当事者にとつては自分の生命に関わる問題ですから、恐怖に近い感覚で法案の行方を追っていました。だが、立場が弱く声をあげられませんか。ですから私は当事者を知る者の責務として、どこかで学習

会があれば必ず出向いて本人たちの叫びを代弁するよう努力します。支援現場の現状を知った人々からは、必ずといっていいほど「なぜ日本はここまで難民を受け入れられないのか」との問いが投げかけられます。

ある大学に呼ばれたとき、私は「国益なくして人権なし」と発言した国会議員の話をしました。すると一人の学生が「人権に優る国益って何ですか」と尋ねました。若者の率直な問いは、真をついています。その究極の答えは戦争でしょう。「人権とは何か」を問う哲学のない社会の行きつく先の恐ろしさを感じました。それでも国会審議が進められるにつれ「難民を守る」と危機感を持つ人が全国で増えてゆきました。国会議員に抗議のファックスを送る人、駅前に立つて声を挙げる人、東京では廃案を求めるデモに7千人もの人が参加したそうです。法案が可決された夜、強制送還の対象である当事者家族のお母さんからメールが届きました。「確かに大変な事態になりましたが、諦めることはありません。信仰と道は必ずあります。信仰と希望は楽観主義を生みます。篤子さん、また明日！」

(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)